# 歳時記

森田たま

読売新聞社

きもの歳時記

昭和四十四年十月十五日　第一刷
昭和四十四年十二月三十日　第二刷

著者　森田たま
発行者　二宮信親
発行所　読売新聞社
東京都中央区銀座三の二の一　〒一〇四
大阪市北区野崎町七七　〒五三〇
北九州市小倉区明和町一の一一　〒八〇二

印刷所　株式会社細川活版所
製本所　協和製本株式会社

定価　五五〇円

©, Tama Morita, 1969

# 目

# 次

一月……5
紋付　東京の女・大阪の女
二月……29
くず餅　お化け　梅小紋　結ぶ
三月……53
面影　紫　縞
四月……79
桃花扇　きもの博士の千家夫人　姑
五月……95
さてもさてもそなたは　衣食住
六月……107
恋ときもの　襦袢の袖

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

七月……119
あひ状　涼しい女　紺がすりの話
八月……151
三代も四代も　砧
九月……165
着物・好色　黄八丈　きものへの新しい息吹き
十月……183
パリの木綿　織物の美しさ
十一月……193
夙川雑筆　着物への執念　絹の美しさ
十二月……219
永遠のいのち　もめんの魅力　絵絣
あとがき……237

装丁　森田　たま

一

月

# 紋付

人生五十年を生きぬくために、むかしの人はいろいろな関門を設けたやうである。まづ厄年があった。

女は数へどし十九、三十三の二回、男も二十五、四十二と二回あって、それぞれをふじに通りこすと、今度は六十一の還暦の祝ひになる。

それから七十、七十七、八十、八十八と祝ひがつづいてゐるが、八十八が米寿の祝ひで、最上のものとされてゐるのは、それまで生きる人の数がすくなかったせゐであらう。近ごろのやうに平均年齢が七十何歳かまでのびてくると、祝賀年齢も変更しなくてはならないかもしれない。

五十年の生活にさまざまな区切りをつけたやうに、年毎の区切りも大切にした。

毎日を怠りなく働いて一年をおくり、新しい年のはじめには皆々紋付を着て屠蘇(とそ)を祝

ふ。青畳の香の匂ふやうな座敷に、家長を上座に、家族一同が紋付を着てならび、年の幼ない者から順々に、屠蘇を祝ってゆく情景は、いかにもあらたまってゐて、しかも和やかで、新しい年のはじめらしくてよかった。女学校にはいった年のお正月に、紫紋綸子の、二枚がさねの紋付ができた時のことは、いまだになつかしい思ひ出として残ってゐる。

十一月三日は文化の日といふことで、功労者に文化勲章の授与式があった。

いままで、大衆作家といふ名目で、この勲章の選に洩れてゐた感じの吉川英治さんが、今回めでたく受賞されたのは、私たちの大きなよろこびであったが、それについて、吉川さんが毎日新聞に執筆された「紋付を着ざるの記」に、私は心を打たれた。

若き日、父上の事業の手ちがひから倒産し、その上、長い病気に就かれたために、一家の生活は自然に長男である吉川さんの肩にかかってきた。いままでの何不足のない富裕な暮しから、一転して、その日の糧にも困るやうな境遇にはいった吉川さんは、それまで通学してゐたブルジョア学校を退学して、ある商店へつとめることになった。それ以来、吉川さんはいろいろな職業に従事して、身を粉にして働き、一家の生活を支へてきた。小説を投稿して、その賞金で一家をうるほしたこともあった。そんな風にして青年の日を迎へた年の正月、御両親がひそかにこしらへておいた紋付の一ト揃ひを出して、吉川さんに着



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

せようとした。

吉川さんはそれをことわった。まだまだ紋付などを着て、くつろぐ時代ではないといふのである。

父上と押問答の末、吉川さんはつひに一生紋付は着ないといひ切った。

子供一人が働いてゐる一家への援助をことわった、名誉ある金持の親類たちの非情さが若い心に深くしみてさういふ階級のよろこぶ紋付など、一生着るものかといふ青年らしい反抗の思ひがあふれてゐたのであらう。吉川さんは物質といふものの貴重さを身に嚙みしめて、その善悪の両面を知り、たとへ天地が裂けようとも自分はつねに庶民の味方であらうと覚悟されたにちがひない。お茶のおよばれなどで、吉川さんにお会ひする時、一度も紋付を着ていらっしゃらないことに、私はいつか気がついた。

戦前からのおつきあひで、やっとこのごろ気がついて、お茶の作法を無視する吉川さんではないのに、どういふわけか、何か理由があるのか、伺ってみたいと思ってゐた矢先きであった。

長年の疑問がとけて、私は胸のうちがすうっとした。さうして一言の弁解もなく、長年のあひだそれを通していらした吉川さんに、あらためて敬意を表した。

おなじやうな過去が、私にもある。

若い日、一生紋付を着まい、新しい年のはじめにも紋付は着まいと心にきめたことが、私にもあった。

さうして三十数年来、まがりなりにも今日まで、どうやら自分流にやってきたけれど、年をとって社会といふものへのつながりが多くなると、それを通すにはいろいろな抵抗のあることを身にしみて味はってきてゐるので、私などよりはるかに早く、社会との接触の多かった吉川さんは、抵抗の度の強さもさこそと察しられて、よく耐へていらっしゃいましたねと、握手の手をさしのべたい感動に駆られたのであった。

むかし、私が決心した場合は、吉川さんのやうに生活につながる問題からではなかったけれど、日本の因襲といふものに対する反逆といった気持には、吉川さんと共通のものがあるのではないかと思はれる。私たち夫婦は結婚にあたって、ある複雑な事情から、区役所に届け出るだけで夫婦になったのであった。結婚式も、もちろん披露宴もなかった。私は自分のうけついだ財産を放棄し、夫もまた自分の分け前を放棄する証文を書いて、実兄から結婚届の判をついてもらった。

八年たち、子供が二人生れてから、関東の大震災にあって故郷河内へかへることになっ

た。ついては出入りの小作人たちに披露しなくては家へはいってもらへない。披露宴には丸髷に結って、黒の裾もやうを着てもらひたい。

夫の生家からのその申入れに対して、私はだまって髪を切った。

断髪にルイズ髷といふハイカラな髷をのせ、いまだかつて着たこともない、チューリップのもやうの紋のない訪問着といふものを着て、河内の田舎の一町四方もある家の披露宴に出席した。一生紋付を着まいといふ決心を、その時にした。

去年、宮中新年御歌会始めに、陪聴しないかといふお誘ひを頂いて私ははじめおことわりした。黒の紋付裾もやうといふものを持ってゐないので、さういふ席へは出られないと御辞退したのであったが、黒は宮中では喪の色であってお使ひにならない。それに紋付でなくとも、失礼な服装でさへなければさしつかへないとのことで、お受けした。六年前、アムステルダムの国際ペン大会に、日本代表として出席がきまった時、外国のさういふ会には必要かもしれぬと、たった一枚だけ紋のついた着物をこしらへた。

小豆色の裾をぼかして、福田豊四郎画伯に、花車をひいた馬の絵を描いて頂いたものである。自分が午年なので馬をお願ひしたのであったが、その着物は伊太利のチビタビキヤで、長谷川路可画伯の壁画完成記念式にも役にたち、またまた宮中御歌会始めにも、着る

ことになったのであった。

だが、私はやはり、これ以外にはもう紋のついた着物はつくらないつもりである。お正月にも、ごちさうはこしらへるけれど、紋付は着ない。

おそらく吉川さんも、晴れの日の紋付はただ一度であって、あとはまた、紋付を着ない正月を迎へられるのではないかと思ふ。紋付の好きな者ときらひな者と、世の中にはどうやらこの二種類の人間が住んでゐるやうである。

（昭和三十六年）

# 東京の女・大阪の女

大阪にゐた時分、東京から転任してきた新聞社の人が大阪には美人がゐないと云ってこぼしてゐるのをきいたことがある。阪急電車の神戸線にお乗りになったら、とさしで口をすると、僕はその電車でかよってゐるのですといふ返事であった。商売柄、花街との縁も深い人なのに、なほかつ大阪には美人がゐないと断言してはばからぬのである。灘五郷の銘酒さへ最上品は東京へとられてしまって、本場へ残るのはその次ぎの品とかいふ話もきく程で、何によらず東京は最上品の集中場であらうが、しかし又東京へ行ってからいろいろに混合されるらしい最上酒よりも、地元に残されたその次ぎの品にかへって純粋な酒の味があるやうに、大阪には大阪の美人がゐるにちがひないと思ふのだが、それならばとひらきなほって何処にゐますかと問ひかへされるとこちらが当惑する。どこにでもゐませうと答へるよりしかたがないからである。

それから一年程たって東京から転任してきた若い会社員がやはりおなじ事を云った。

「東京ではいたるところに――つまりバスの中でも省線電車でも街を歩いても必ずひとりは美人がゐますがね。そして一週間に一度ぐらゐはあッと思って一ト眼で惚れこんでしまふやうな美人に会ひますが、大阪へきてみるとさっぱりそんな人がゐませんね、憂鬱ですよ」

街を歩いてゐる美人は彼女自身でも気づかぬあひだに自然に街の花となってゐるわけで、結婚の未来をもつ若いサラリイマンたちにとっては、毎朝の一杯の紅茶か珈琲とともに、なくてはならぬ存在であるらしい。この人も阪急の神戸線で大阪へかよってゐるので、そんなに美人に会はないのは時間がわるいからに相違ない、おひるまへの十一時頃から一時頃までの間に乗ってごらんなさいと私はすすめたが、さて自分が東京へきてみると、時も処も超越してまったくいつ何処へ行ってもかならずひとりやふたり美人を見かけぬ事はないので、東京の美人といふものはいつでも街ばかり歩いてゐるのかと変な錯覚を起した程であった。だがバスの中などであまり近々と顔をあはせて長い間一しょに乗り合はせてゐると、はじめは美しいと思った人の顔にもだんだんあらが見えてきて、紅や白粉やまゆずみをおとしたあとの素顔はなんとなくざらざらしてゐるやうにおもはれ、大阪の



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com